

第28回 “北方領土を考える” 高校生弁論大会の記録



『考えよう みんなで解決 北方領土』

(平成25年度 北方領土に関する標語最優秀作品)

主催 公益社団法人 北方領土復帰期成同盟

後援 外務省 内閣府北方対策本部 北海道 北海道教育委員会
札幌市 札幌市教育委員会 北海道高等学校長協会 北海道高等学校文化連盟
独立行政法人北方領土問題対策協会 公益社団法人千島歯舞諸島居住者連盟

1 主催者挨拶



公益社団法人
北方領土復帰期成同盟
会長 堀 達也

第28回“北方領土を考える”高校生弁論大会の開催にあたり、ご挨拶を申し上げます。

本日の主役である高校生の皆さん、本大会にご参加をいただき、心から敬意と感謝を申し上げます。また、ご来場いただいた多くの皆様方に、厚くお礼を申し上げます。

“北方領土を考える”高校生弁論大会は、多くの高校生の皆さんに北方領土問題について、関心と理解を深めていただき、「北方領土について考える」をテーマとして、北方領土問題解決に向けた自らの考えを発表していただくことを目的に開催いたしております。

28回を迎える本大会は、これまで延べ400校、2,300名を超える高校生の皆さんに応募をいただき、高校生らしい柔軟な考え方と、豊かな感性のもと、若さと熱意溢れる表現力による主張や提言が、聴衆の皆さんに感銘を与えてきました。

さて、北方四島を取り巻く環境は依然として厳しい状況にありますが、昨年4月に日ロ首脳会談が行われて以降、これまで4度の両首脳による会談が行われるなど、日ロ首脳による対話が重ねられたことは、一日も早い北方領土問題の解決に向けた外交交渉の進展を強く期待させるものです。

北方領土問題の解決は、我が国の主権に関わる国的重要な課題であります。政府においては、毅然とした姿勢で強力な外交交渉を更に推し進めて頂きたいと考えております。

当弁論大会を実施しますこの時期は、2月7日の「北方領土の日」特別啓発期間として、様々な啓発事業を展開しております。ご来場の皆様には、北方領土返還に向けた強い思いを共有していただき、政府の外交交渉を支え、後押しする力強いご支援を心よりお願いいたします。

また、高校生の皆さんには、これまでの取組を活かし、返還要求運動を支える大きな力として、自ら出来ることを、それぞれの立場で取り組んで頂けるよう心から期待しております。

弁論発表者の皆さんには、7分間という限られた時間の中で北方領土についての自らの熱い思いを表現していただきたいと思います。ご健闘をお祈りいたします。

また、会場の皆様には、温かいご声援を頂きますよう、宜しくお願ひいたします。

結びに、ご来場の皆様、そして、この大会開催に、ご支援、ご協力をいただいております、外務省、北海道高等学校文化連盟弁論専門部、関係団体、生徒指導に当たられておられる先生方に、心からお礼申し上げます。

2 激励メッセージ



外務大臣
岸田 文雄

「第28回“北方領土を考える”高校生弁論大会」の開催に当たり、一言御挨拶申し上げます。

はじめに、北方領土問題に高い関心を持ち、本日の弁論大会に参加されている高校生の皆さん、そして日頃から北方領土返還要求運動に粘り強く取り組んでおられる関係者の皆様に対し、心から感謝と敬意を表します。

北方領土問題は日露間の最大の懸案事項です。昨年4月末にロシアを公式訪問した安倍総理は、プーチン大統領との間で、戦後67年を経て日露間で平和条約が締結されていない状態は異常であるとの認識を確認しました。その上で、両首脳は、双方に受入可能な解決策を作成する交渉を加速化させるとの指示を両国外務省に共同で与えることに合意し、その後も着実に対話を進めています。日露関係全体の発展を図りながら、北方四島の帰属の問題を解決し、ロシアとの平和条約を締結するよう、腰を据えて交渉に取り組んでまいります。

北方領土問題の解決には国民の皆様の御理解と御支持が欠かせません。

国民一人ひとり、特に若い世代の皆さんが、北方領土問題に対する認識を深め、その解決の重要性を理解し、広く訴えることが、国民世論を盛り上げ、平和条約締結に向けた政府による対ロシア交渉を強く後押しすることとなります。北方領土返還の実現に向け、引き続き日本の将来を担う皆さんから力強い声援を頂きますようお願いします。

最後になりますが、本日御出場の皆さんのお健闘をお祈りして、激励の挨拶とさせていただきます。



北海道知事
高橋 はるみ

第28回“北方領土を考える”高校生弁論大会が、多くの高校生の皆さんとの参加のもとで開催されることは大変意義深いことであり、開催にご尽力いただいた大会関係者及び教育関係者の皆様に厚く感謝を申し上げます。

我が国固有の領土である北方領土を巡っては、これまで何度も、日中間で外交交渉が行われてきましたが、問題解決につながる進展が見られないまま68年もの長い年月が経過しました。

この間、北方領土を追われた約1万7千人の元島民のうち、既に1万人以上の方々が帰郷の願いのかなわぬままお亡くなりになつております、一人でも多くの方々がお元気なうちに、故郷の地を自由に踏みしめることのできるよう、道として一日も早い領土返還を強く求めているところです。

こうした中、昨年は、4月に安倍首相が日本の総理大臣として10年ぶりにロシアを公式訪問し、プーチン大統領との会談が実現し、その後も、サミットやAPECに合わせて首脳会談が開催されたほか、外相会談や次官級協議が行われるなど、日中間で外交交渉が活発に重ねられました。

北方領土問題の解決に向けては、政府において強力に外交交渉を進めていただくことはもちろんですが、こうした国の外交交渉を支え、後押ししていくためには、何よりも国民一人ひとり、特に若い世代の方々に、この問題についての正しい知識と関心をもつていただき、領土返還を強く願う国民世論を結集していくことが大切です。この弁論大会の開催を通して、多くの皆様に領土問題に関する意識が高まっていくことを期待しています。

道としても、教育機関と連携して、道内の小中学生を対象とした元島民の皆様による「北方領土語り部事業」などに取り組んでおり、今後とも、将来の返還要求運動を担う小中高生など若い世代の方々の理解と関心を一層高めることができるよう、さらに取組を進めていきたいと考えています。

弁論大会に参加された高校生の皆様は、この大会への出場を機に、北方領土問題について沢山のことを学ばれたことと思います。本日は、こうした中で感じた思いとともに、領土問題の解決に向けたご自身の意見・主張についての若者らしい情熱に満ちた発表をしていただき、素晴らしい大会となることを心から願っています。

2 激励メッセージ



北海道教育委員会教育長
立川 宏

“北方領土を考える”高校生弁論大会に出場される生徒の皆さん、出場おめでとうございます。

昭和61年度に始まった本大会は、今年で28回目を数えるまでになりました。この間、皆さんの先輩方の発表が、北方領土の早期返還を強く願う元島民の方々をはじめとする地域の皆様、道民、そして国民の方々に、大きな勇気と希望を与えてきました。

事前審査を経て選考され、本大会に出場される皆さんには、日頃の学習の成果を十分に發揮し、北方領土について考えていることを、堂々と述べていただくことを期待しております。

さて、北方領土問題については、長年にわたる日本とロシア両国の首脳による継続的な対話や、平成4年から実施されている「ビザなし交流」による日本人と北方四島に在住するロシア人の相互訪問などにより、両国間の相互理解と友好が深められておりまます。

また、昨年は、札幌市において、道内の高校の弁論部員を対象とした外務省職員による出前講座や、根室市において、全国の中高生や教員等を対象とした北方領土問題青少年・教育指導者現地研修会が開催されるなど、北方領土問題に関する理解や認識を深める取組が進められております。

こうした中、皆さんのような若い方々が、この弁論大会への参加を通して、北方領土問題に対する関心をより高め、日本とロシアの両国民の相互理解を深めつつ、返還運動を一層広げ、領土問題を解決していこうとすることは大変意義深いことであり、国際平和の維持と領土問題の平和的な解決のためにも大きな意味があると考えております。

昨年の大会では、「領土問題の解決に向けた自分のこれから役目は、『領土問題について知ってください』と、小さな種を蒔いていくことであり、その種が、根を張り、枝を伸ばし、日本や世界という垣根をも越えて、大きく葉を広げた結果、『領土返還』という実を結ぶ」というメッセージなど、素晴らしい内容の発表が数多くありました。

今回、本大会に出場される皆さんには、発表の準備の過程で多くの資料を調べたり、様々な方々からお話を伺ったりするなどして、北方領土問題の歴史的背景や領土に関する国際法の意義などについて理解を深めるとともに、北方領土問題がいかに身近であり、かつ、日本にとって大切な問題であるかに気付いたことと思います。

結びに、次代を担う皆さんのが若さと熱意あふれる素晴らしい提言や発表が、多くの人々の共感を得て、北方領土返還運動の輪がさらに広がり、一日も早く北方領土の返還が実現されることを心から願うとともに、皆さんのがこれまでの努力の成果を存分に發揮されることを期待して、激励の言葉といたします。

第28回“北方領土を考える”高校生弁論大会プログラム

開会式 感謝状贈呈	(12:30開会) 長年応募いただいた学校に感謝状を贈ります。 公益社団法人北方領土復帰期成同盟感謝状 立命館慶祥高等学校 様 公益社団法人北方領土復帰期成同盟感謝状 北海道別海高等学校 様
第Ⅰ部	高校生弁論大会 「主題～北方領土について考える～」 ●審査員紹介 ●弁論発表 14校 14名(発表は1人7分以内)
第Ⅱ部	ミニコンサート 出演: B&Wアンサンブルラボ ◆メンバー ☆トランペット: 中嶋 和哉 ☆トランペット: 須田 あゆり ☆アルツサックス: 堀 雅彦 ☆テナーサックス: 池尻 健
第Ⅲ部	表彰式 ●審査講評 ●成績発表 ●表彰 最優秀賞 1名 外務大臣賞 優秀賞 1名 北海道知事賞 優良賞 3名 北方領土復帰期成同盟会長賞 ※最優秀賞及び優秀賞受賞者には副賞として『総理大臣表敬訪問』を実施します。
閉会	

■ 弁論発表者(発表順)

準備弁論 1 川辺 聖鈴 2 中島脩太郎 3 多田 里奈 4 齊藤 風雅 5 鶴海 駿 6 桶田みつき 7 富宅沙也加	かわべ まりりん なかじましゅうたろう ただ りな サフキン ヴラディスラフ さいとう ふうか おしうみ しゅん おけた とみたくさ やか	1学年 武修館高等学校 2学年 旭川大学高等学校 2年生 北海道根室高等学校 2年生 北海道日高高等学校 1年生 北海道札幌月寒高等学校 1年生 北海学園札幌高等学校 1学年 武修館高等学校 1年生 北海高等学校	8 秋田 晃兵 9 右谷 潮 10 稲葉 有咲 11 村井 元暉 12 井上 幸子 13 盛合 樹 14 安田さやか	あきた こうへい みぎたに うしお いなば ありさ むらい もとあき いのうえ ゆきこ もりあい いづき やすだ やすだ 2学年 北海道札幌藻岩高等学校 1学年 立命館慶祥高等学校 2学年 北海道鹿追高等学校 4回生 北海道登別明日中等教育学校 2年次 北海道札幌旭丘高等学校 2年生 北海道別海高等学校 2学年 北海道根室西高等学校
--	--	---	--	--

■ 大会審査員(順不同)

井 潤 裕	北海道大学スラブ研究センター 学術研究員
石川 徹	北海道新聞社編集局報道センター 副センター長
佐々木 高至	北海道高等学校文化連盟弁論専門部長(北海道札幌旭丘高等学校校長)
中田 和子	北海道女性団体連絡協議会 会長
高橋 慶太	外務省欧州局ロシア課 課長補佐
田尻 忠三	北海道総務部北方領土対策本部 北方領土対策局長
森 徳男	北海道教育厅 教育指導監

大会入賞者

【最優秀賞】



富 宅 沙也加

北海高等学校

1年生

外務大臣賞

【優秀賞】



SAVUSHKIN VLADISLAV

北海道日高高等学校

2年生

北海道知事賞

【優良賞】



黒葉 有咲

北海道鹿追高等学校

2学年

北方領土復帰期成同盟会長賞

【優良賞】



安田 さやか

北海道根室西高等学校

2学年

北方領土復帰期成同盟会長賞

【優良賞】



鷺海 駿

北海学園札幌高等学校

1年生

北方領土復帰期成同盟会長賞

第28回大会応募高等学校(五十音順)

応募校	応募生徒数	応募校	応募生徒数
旭川大学高等学校	1	北海道鹿追高等学校	1
武修館高等学校	27	北海道根室高等学校	1
北海学園札幌高等学校	1	北海道根室西高等学校	1
北海高等学校	1	北海道登別明日中等教育学校	1
北海道札幌旭丘高等学校	1	北海道日高高等学校	1
北海道札幌工業高等学校	1	北海道別海高等学校	1
北海道札幌月寒高等学校	1	立命館慶祥高等学校	1
北海道札幌藻岩高等学校	1	計 15校	41名

応募実績校地区別一覧

地区	学校数	応募実績校 ()内は応募回数		
札幌	18	北海(28) 有朋(16) 札幌龍谷学園(16) 北海学園札幌(19) 札幌東豊(5) 札幌旭丘(12)	北星学園女子(2) 札幌月寒(9) 札幌平岸(2) 札幌藻岩(6) 札幌聖心女子学院(3) 札幌西(3)	北嶺(2) 札幌星園(1) 札幌北(1) 札幌東陵(1) 札幌藤女子(1) 札幌工業(2)
石狩	4	立命館慶祥(15) 野幌(1)	石狩南(1)	大麻(7)
渡島	3	函館白百合学園(10)	函館大付属柏稟(1)	函館ラ・サール(3)
檜山	1	江差(1)		
後志	3	小樽潮陵(2)	二セコ(1)	蘭越(1)
空知	2	岩見沢緑稜(1)	幌加内(1)	
上川	8	旭川大学(11) 旭川藤女子(6) 名寄産業(4) [名寄農業を含む]	名寄光凌(1) 旭川東(1) 下川商業(2)	旭川北(1) 旭川龍谷(1)
留萌	1	天壳(1)		
宗谷	1	礼文(2)		
網走	3	網走(13)	北見藤女子(2)	北見商業(9)
胆振	3	室蘭工業(2)	厚真(1)	登別明日中等教育(7)
日高	3	えりも(1)	様似(1)	日高(1)
十勝	8	白樺学園(11) 帯広南商業(4) 帯広三条(4)	帯広柏葉(1) 帯広農業(1) 帯広工業(1)	鹿追(5) 浦幌(1)
釧路	12	武修館(24) 釧路工業(11) 厚岸潮見(5) 釧路商業(1)	釧路東(2) 釧路北陽(2) 釧路江南(1) 釧路明輝(4) [釧路北を含む]	阿寒(4) 弟子屈(2) 釧路湖陵(4) 標茶(2)
根室	7	根室(21) 根室西(17) 標津(2)	中標津(3) 中標津農業(8)	羅臼(8) 別海(10)

計 78校

弁論の記録

1 審査講評



審査委員長
佐々木 高至

北海道高等学校文化連盟弁論専門部長

私も弁士になった気持ちで緊張して講評させて頂きます。

はじめに、一人ひとりの弁論がとても素晴らしいものでした。

自分なりに主題を考えて、論理的に構成し、堂々と、感情を込めて弁論している方が多く、最後まで興味深く拝聴しました。

それでは審査会で出た評をいくつか紹介して講評とさせて頂きます。

まず、要望として、こうしたらよいのではないかということが一点あります。

それは評論家になりすぎてはいけない。頭の中だけで考えた、世間一般の考え方を述べることに終始してしまわないようにしてほしいということです。自分に何ができるのか、具体的な提案を取り入れ、自分なりの意見を掲げて、論旨を組み立てていくことが、今後大事じゃないのかなとおっしゃった審査員の方が何人かおられました。

良い点としては、先に述べたとおり、皆さんか高校生らしく、堂々とフレッシュで好印象であったこと。伝えたいという熱意が非常に伝わってきて素晴らしい弁論をして頂いたと思います。実体験からくる弁論が多くて、そのためにいろいろ調べて、いろいろ体験して、いろいろなことを実行して、日頃の取組が伝わってきました。非常に良かったと思います。

最後に、この北方領土の問題を、さらに深く広く捉えていくことが今後必要になっていくのではないかと思います。

以上、審査会の皆さんの意見を代表して講評といたします。

2 入賞者弁論文集

最優秀賞

北海高等学校 | 1年生 | 富宅 沙也加

「北方領土について考える」

「夢の世界にいるみたい」四島に住む子ども達が札幌の町並みを眺めながら発した言葉の数々。私にとって見慣れた景色が、彼らには輝いて見えることが何よりも印象的であり、距離は近くとも自由に会えないことに歯痒い思いをしました。

7月に札幌で行われた北方交流受入事業。弁論部の代表として参加した私は、四島の子ども達と出会ったことで変わっていきました。観光しているときに慣れないロシア語で話しかけると、目を輝かせながら答えてくれる彼らのことが一つの間に大好きになり、別れ際に日本語で「また会いましょう」と言ってくれたことは忘れることができません。彼らとの再会を心から願い、ロシア語や北方領土について学び始めました。

そして、9月には訪問事業として国後島へ。偶然にも中等学校の見学で、受入事業で交流した子と再会し、更にアリーナというかけがえのない友人と出会いました。「日本が大好き」と多くの人から声をかけてもらいましたが、最も優しく接してくれたのは彼女でした。彼女も参加した住民交流会で、私は現島民の日本に対するイメージ等が聞けるような話し合いを期待していましたが、内容は国後に住む子ども達と絵を描くことでした。これでは何も知り得ないだろう、と複雑な心境のまま参加していた私に、子ども達が話し掛けてきました。「ここに友好と書いてください」そう言い、日本とロシアの国旗や船が描かれた紙を日本人に渡す姿、そしてそれを見守るアリーナの笑顔を見たとき、気付いたのです。彼らの言葉は、これまでの北方交流があるからこそ出た言葉なのだろうと。

我が國固有の領土でありながら未だ不法占拠されたままである北方領土。ビザなしによる北方四島への訪問も自由行動は許されず、私は最初、交流が本当に問題解決の手口になるのだろうか、と自問自答を繰り返していました。しかし、子ども達からでた「友好」という言葉で、今までの交流で相互理解を深め、認識が変わっていることを感じたのです。北方領土返還要求を現地の方に促すばかりでは、この言葉は彼らから聞けなかつたでしょう。

それと同時に、私の中で不安が生まれました。私が北方領土問題で一番危惧するのは、どのような解決方法であれ、その後の信頼関係についてです。今までの交流で培われた絆、それはどうなるのでしょうか。交流が領土問題解決と同時に終わりを迎えるということは、また両国の理解にズレができてしまうことだと思います。長い間かけて築かれてきた友好の架け橋が崩れしていくことがとても不安です。

だからこそ、私は四島返還後の「混住可能な共同開発」という形が理想的であると思います。そうした世界では稀に見る、新たな共存・共栄の形を模索し、共同体の新しい形を、地域機構・国際機構を世界に発信するのです。

今まで「平和主義」を掲げ、平和的解決に尽力してきた日本ならば可能であることだと私は考えます。そのためには、北方領土返還後に備えて、私達日本人が受け入れる準備ができていること、四島の人達も受け入れができるよう配慮することが重要ですが、今まで積み重ねてきた交流で友好を作り上げることができたのであれば、それを基盤として和解や協力もできないことではないでしょう。日本には、世界中が信用・信頼をおく、「文化力」があるからです。非常に魅力的な文化が創造される国であり、なおかつ私達の文化は相手国の中でも許容し、作り変えてきました。経済・政治的な場面でトラブルを抱えても、私達日本人にはその困難を乗り越えていける力が備わっている、そう信じています。

私は今、札幌や国後で出会った四島に住む友人達とメールでやり取りをしています。アリーナから日本語で「また会いましょう」とメールが届いたとき、私は確信しました。彼らと再会し、また手を握り前へ歩くことができる日が必ず来ると。北方領土を遠い存在であると考えている人達に、私が感じた彼らの温かさを知ってほしい。そして、四島に住む子ども達に、再び夢の世界を見せてあげたい。いつまでも続く交流こそが、私達を繋ぐ絆そのものなのです。「再会」という夢が実現する頃に、平和かつ自由な交流が実現していくほしい。それが私の一番の願いです。

「北方領土について考える」

私は北海道日高高校に通う在日ロシア人です。母親がロシア大使館で働くことになり来日しました。当時日本の方とはあまりわからず、日本へ来ることにためらいがありました。

来日し、私は大使館の中にあるロシア学校へ通うことになりました。「北方領土返せ！返せ！」ある日、大使館の外が騒がしくなりました。幼かった私はなんのことかわかりませんでした。「ロシアは嫌われているのかな？」と思った程度で、その時は全く興味も示さず授業を受けていました。しかしそのあとも、騒がしさは収まらず、街宣車が頻繁に来ていました。私は「北方領土とは何だろう？」「何が起きているのだろう？」と疑問に思い始めました。

ロシアにいたときは、モスクワから遠い北方領土について何も知りませんでしたが、日本に来て初めて北方領土について意識し身近に感じました。

私は小学5年生になり日本の学校に入ることになりました。そして月日は流れ、北方領土の問題について学んだのは、中学2年生の時でした。

「1945年、終戦後すぐにソ連軍は北方四島を占領しました。」学校の先生からそのことを教えられた私は悲しくなりました。「なぜロシアが北方領土に攻め込んだのか？」「北方領土を日本に返せばいいのに！」また、ロシアの話題がでると、ロシア人というだけで同級生から罵声を浴びせられ、また叩かれました。そのときは自分がロシア人であることを恨んだこともあります。

「なぜ日本人はロシア人に悪いイメージを持っているのか。」「日本にいるロシア人は昔ソ連がやった事を全部反省し、受け入れなきゃ駄目なのか？」

ソ連は崩壊しロシアへと変わりましたが、ソ連時代と思想・行動が一緒では何も変わらないと思います。

「Врачую, и с целился сам！」これはロシアのことわざで、他人を責める前に、自分を正せという意味です。

ロシア人の多くは北方領土のことをよく知りません。しかしそれは日本人も同じでした。日本人もロシア人ももつと北方領土を知る必要があり、知る義務があると思います。現にロシア人もソ連が何をしたのか分かっていない人たち

が大勢います。何も知らないで他人を責めるのは卑怯なことです。この想いが、北方領土について調べるきっかけとなりました。

しかし、調べているうちに色々な人の話や、たくさんの情報に私は飲み込まれてしまいました。

そこで私が特に重視した点は、「なぜ日本がそこまでして強く北方領土返還を求めているのか？」「なぜ、そこまでロシアは返還したくないのか？」その二点でした。

日本は70年近く、北方領土を日本固有の領土だと訴え続けています。しかも、歴史的な見解から見ても日本固有の領土だと主張し続けている日本は、政府をはじめとする各都道府県や民間団体の組織を作り返還運動を行っています。

一方ロシアは、日本の主張に耳を傾けていますが、返還へ一歩も踏み出せていないのが現状です。なぜこの問題は解決しないのでしょうか？それは両国の「認識の違い」にあると思います。

1945年8月15日、日本はポツダム宣言を受け入れたのにもかかわらず、終戦後に領土を奪われたと訴えています。しかし、私が知っているロシア側からの認識は違いました。両国の「認識の違い」が生まれているのは、お互いの意思を尊重し、わかり合おうと思っていないからではないでしょうか。

過去に戦争という悲劇が起こったことは事実であり、過去を変えることはできません。今すべき事は、お互いの事を知り、分かり合うことです。また、今後解決に向けて、私たち若者の活躍が必要です。そのためにも多くの世代で北方領土問題に対する考えを話し合い、お互い歩み寄ることはできないでしょうか。

ロシアは過去にこだわらず、新しい考えをもって対話しなければなりません。そのためにもお互いが北方領土問題について「考える」とこととお互いを分かり合うことで両国の「認識の違い」を「共通の理解」にしなければいけません。私たち若者はこの問題を深く知り、学ぶ必要があり、深刻に受け止めることが重要です。

私は日本に住むロシア人として、両国の考え方を対等な立場で受け止めることができます。将来少しでも両国の架け橋になり、両国の解決に向けて力になることができればと思っています。

「ゆるぎない信念を持った返還運動のために」

もしあなたが、外国人に即席で日本地図を描いて、北海道の位置を教える場面に遭遇したとき、その地図の中に北方四島を描きますか？ちゃんと北海道のすぐ東に、ひょろながい島を二つと、その南側に小さな島を二つ、描きますか？私は描いたことがありませんでした。

1年前、カナダでホームステイをしたときのことです。私が日本地図を描くと「どうして、北海道の東側の島は描かないの？」と尋ねられました。「そういえば、描いていないな」と、はじめて北方四島に対する自分の意識の薄さに気づき、これをきっかけに北方領土問題について調べてみることにしました。

実際、今の日本人は北方四島全ての島名を言うことができるでしょうか。実は私は、高校の入試問題で「択捉島以外の3島を書きなさい」という問題が出た時に、そのすべてを答えることができませんでした。一般的に見ても、過去5年間に高校入試で出題された北方領土に関する問題の正答率は30%から50%。決して高いとはいえない。私たちは、北方四島についての知識も意識も足りないです。

そうであるならば、まずは北方四島についてあまり知らない人たちに、もっと北方領土問題をアピールすることが必要です。そこで例えば「ゆるキャラ」を作る、というはどうでしょう。国後島なら「くなっしー」、歯舞群島なら「はぼまいんちゃん」なんていった感じで、北方四島それぞれについて、ご当地ゆるキャラを作る。「しこたん、カワイイ」なんてところからスタートして、子どもたちに北方四島について知ってもらう。熊本県の「くまもん」は今や県内にとどまらず、全国のお土産屋で見かけるようになりました。ゆるキャラ効果で、私たちにとって北方四島が身近なものとなり、日本地図を描くときに当たり前のように北方四島を描いている。そんな日が来たら、すてきだと思いませんか？

生まれ育った馴染みのある故郷を無情にも強制的に退去させられ、目と鼻の先にあるふるさとに、もう70年近くも住むことができない。これが北方四島の元島民の方々の今の状況です。

私は小学2年生から4年生までの3年間をエジプトのカイロで過ごしました。私にとってエジプトは第二の故郷。私は、いつかまたエジプトに帰りたいと思っています。しかし、デモと治安維持部隊が衝突を繰り返す現在のエジプトは、私が気軽に訪れるができる場所ではありません。たくさんの思い出、たくさんの風景、そしてたくさんの友人たち。たとえ住んだのが3年間であっても、エジプトは私にとって大切な場所です。でもいまや、帰りたくても帰れない、そういう場所になってしまいました。

だから私は、元島民の方々の気持ちを考えたとき、何とも言えないやりきれない気持ちになります。目と鼻の先にあるのに、帰りたいのに、帰れない。私とは比べものにならないくらい、辛く、切なく、やりきれない思いを持っているのだと思います。ふるさとに帰りたい。しかし、ふるさとに住める日が来ることを誰よりも強く願っている、そういう元島民の方々の多くが、決して曖昧な形の決着を望んでいないことも事実です。戻りたいのはやまやまだけれども、日本のために、みんなのために、きちんと筋が通ったかたちで解決してほしい。そのような元島民の方々の思いを、私たちは、自分に関係ないことにしてしまって本当によいのでしょうか。元島民の方々の思いに応えるためにも、日本国民全体の問題としてとらえ、動き出すことが必要だと思います。

ゆるぎない信念の下で、北方四島が戻ってくるその日まで運動の手をゆるめない。そう、さきほど私が提案した「ゆるキャラ」の「ゆる」は、決して「ゆるい」という意味ではないのです。北方領土返還運動の手を「ゆるめない」、そして、「ゆるぎない」信念。そのシンボルとしての「ゆるキャラ」なのです。

元島民の方々も高齢化が進み、残された時間はあとわずかです。ふるさとで暮らしたい。ご先祖のお墓にお花をあげたい。思い出の場所を散歩しながら、幼なじみと昔話をしたい。元島民の方々の、そんな当たり前の願いか叶えられる日が一日も早く来るために。私たちひとりひとりの問題として、北方領土問題に取り組みましょう。ゆるぎない信念を持って！

「根室から広がれ！人の輪・領土返還の輪」

「こんなに悲しい思いをしている人がいるんだ」。元島民の叔母の話を聴きながら、私は、これまでにないほどに胸が苦しくなりました。

私の叔母は国後島出身の元島民です。私自身が島民三世ということもあって、学校で北方領土について学ぶうちに、もっと詳しく知りたいと考えるようになりました。叔母に話を聞いてみると、小学生のときに父親の船で根室に逃げてきた際の恐ろしい経験など、涙ながらに思いを話してくれました。そのとき、「もっと北方領土問題について知りたい。そして、少しでも返還の力になれることがあるならば、どんどん関わっていきたい」と、強く思いました。

私が所属する「北方領土研究会」は、北方領土問題について、多くの人に興味をもってもらおうと、返還要求運動の署名活動をはじめ、領土問題への関心を喚起するラジオ放送の収録など、様々な活動を行っています。その中のひとつが、主に道外の方々に行っている「北方領土出前講座」への講師としての参加です。私は、神奈川県で出前講座を行いましたが、真剣なまなざしで話に耳を傾け、必死にメモをとる先方の皆さんとの姿に、道外にもこんなに関心を抱いている方がいるのだ、と胸が熱くなりました。そして今年の6月、今度は神奈川の方々が根室を訪問されました。交流会で再会を喜び合い、一緒に元島民の方の講話を聞きました。ソ連に占領された当時の暮らしぶりや脱島の話など、その悲惨さは耳を塞ぎたくなるほどで、叔母の話とも重なる部分がたくさんありました。道外の方とこのような時間を共有できたことは、今後活動を続けていく上で大変有意義なもので「北方領土問題について、もっと多くの人に考えてもらいたい」という思いは、ますます強くなりました。

これまで、様々な活動に参加していて気付いたことがあります。それは、北方領土問題について、いちばん関心を抱いていなければならないはずの私たち、根室市民の領土問題に対する関心の低さです。特に、若者にその傾向が見られ、市が行ったアンケートによると、十代・二十代で「北方領土返還要求運動に参加したい」と答えた人は、50%程にとどまっています。そこで、まずは地元の若い世代に関心をもつてもらうための取り組みが必要と考えます。私たちが日頃行っている出前講座を根室の小中学生にもっと積極的に行

い、興味を持った生徒を私たちのラジオ番組に招いて共に活動を行っていく。ひいては、道外から訪れる小中高生も巻き込んで番組を創り上げていく。さらには、そういった自分たちの活動のタイムリーな情報を、若い世代にもなじみ深い「Twitter」などの「SNS」を利用し、北方領土に最も近い最東端の地から、広く発信していくべきだと考えています。まずは根室を中心に、人の交流を活発にしていくことで運動の盛り上がりに結びつけていきたいです。

さらに、私が強く訴えていきたいのは、今後の四島の方々との関わり方です。私たち研究会も、ビザなし訪問や根室市主催の夕食交流会などで四島の方々と積極的な交流を行っています。良好な関係を築くことが領土問題解決の糸口になることは間違ひありません。しかし、本当にそれだけで議論は進展するのでしょうか。ビザなし交流は相互理解を目的としていますが、最近新聞記事で読んだところによれば、四島側は「積極的な相互交流は歓迎するが、領土問題に関する議論には応じない」という姿勢を見せているそうです。これからは、今までより一歩踏み込んだ交流が必要になるのではないでしょうか。私は、まだ北方領土に行ったことがありません。ぜひその機会を得て、叔母のような元島民の声を、直接四島の方々に届けたいと考えています。

元島民の悲しみや無念さを、心を込めて訴え続ければ、四島の方も耳を傾けてくれるのではないかでしょう。そして、四島側から「もっと日本と、領土問題について話し合わなければ」という声があがることが、私の最大の望みです。

元島民の高齢化は進み、領土問題を伝えていく人は年々減っていきます。終戦当時、1万7千人以上いた元島民が、今では約7千人にまで減少してしまいました。ご存命の方の平均年齢も80歳に近づいています。無念のまま亡くなっていく人がどんどん増えていく…。このような悲しみには、これ以上耐えられません。叔母の涙は、大事なふるさとを奪われたことへの無念さ、そして、日本人としての誇りを失いたくないという思いの表れではないでしょうか。元島民の方の故郷が帰ってくるその日まで、私は粘り強く活動を続けます。水面に落ちた一粒の水滴が、大きな円を描くように、根室から、日本全国、四島、そして世界へと、領土返還の輪を広げていくことが、私の使命です。

「北方領土について考えること」

「クラスで一番になりなさい、二番でもいいけれど、ゆくゆくは一番になりなさい。」

これはお酒に酔うと決まって私に言ってくる祖父の言葉です。祖父は成績が優秀で、自分の通知表に納得がいかないと、先生に

「これは間違っていませんか？」

と尋ねていくほど、勉強の虫でした。そして、天皇陛下から勲章を授与してもらったこともある私にとって自慢の人でした。そんな祖父は樺太出身者で、小学校4年生のときに樺太の野田から真岡、そして函館へと引き揚げてきた経験をもっていました。ロシア軍の恐怖に怯えながら、たくさんの荷物を持ち歩き、ときにはトラックの荷台に自分の体を紐で縛り付けて逃げ、そうやって2年を費やし、真岡から船で北海道に引き揚げて来たそうです。

私は祖父の昔話を何度も聞くうちに、日本とロシアとの関係に興味を持つようになりました。そして、日本とロシアとのあいだに横たわる北方領土問題にも関心を抱くようになったのです。

今年の7月、私は「北方四島交流受入事業」に参加しました。これは北方四島に住むロシア人の若者と交流を深めるもので、外務省の方による講演会と交流会と施設見学が主な内容でした。私はこの事業への参加にあたり、ロシア語集をいただいたので、自己紹介を上手にできるようにと、

「ミニヤー ザヴート おしうみ しゅん」

と何度も心の中で繰り返していました。私たちは札幌ドーム、JRタワー、石屋製菓の白い恋人パークを見学し、昼食も彼らと一緒にありました。そして、ロシア語がわかる大学生の方々が中心となって進めた交流会にも参加しました。私はこのなかで、何度かチャンスがあったと思うのですが、思うように交流を深めることができませんでした。講演会のなかでも、北方領土問題についてどのような考えをもつているのかをロシアの若者に聞いてみてもよいと言われていた私たちなのですが、実際には思うように意見を述べたり聴いたりする気持ちの余裕はありませんでした。そして、それは私だけではなく、ほかの日本人学生のみなさんもそ

うでした。

これまでに、ビザなし交流において日本からは1万1,473名が、北方領土からは8,282名が相互に訪問しています。そして、そのなかで北方領土問題について、日本人とロシア人島民とが直接、顔を合わせて話し合う機会も設けられています。今回も若者どうしが、平和な未来を築くために積極的に意見を交わすチャンスだったのです。でも、私自身、実際には言葉の問題があつたり、北方領土問題を話題にすると険悪な雰囲気になると考えて消極的になってしまったのです。今回、私はこの交流事業に参加する機会を得られたという点で、とても貴重であり、感謝の気持ちでいっぱいなのですが、やはり、北方領土問題についての理解が深くはなく、関心はあってもロシアの若者とこれを話題にするほどの時間を持つことは叶いませんでした。挨拶を交わし、笑顔で会話集にあった一つ、二つを口にしたのみでした。

私は小学生時代を横浜市で育ちました。しかし、横浜市では北方領土問題について習った記憶はありません。しかし、札幌市に転校してからは、少しではありますが、教科書以外の資料を使って、北方領土が日本に返還されるよう努力しなければならないと教えてもらったことがあります。そうです、地域によってこの問題に対する取り組みに温度差があるがゆえに、私たち若者も理解は深まらず、皆、自信がないのです。私は全国共通の北方領土問題に関する副教材の作成を訴えます。そして、先生方もそれを学校で積極的に使ってほしいとお願いします。

私もいま、北方領土問題に関する図書に目を通し、祖父の昔話を耳を傾ける日々です。それは社会の教師となり、北方領土問題に関する副教材の作成に携わり、北方領土問題を伝えられるようになりたいと考えるからです。いずれは自信をもってロシアの若者と北方領土問題を熱く語り合う、そんな自分を思い描きながら、祖父が常日頃言う、

「一番になれ」

ということを、私はこの問題の学習において実現しようと自分を励ますのです。

平成25年度 総理表敬訪問

(平成26年3月17日)

1 訪問目的

“北方領土を考える”高校生弁論大会において最優秀賞及び優秀賞を受賞した高校生による内閣総理大臣への表敬訪問を行い、内閣総理大臣から激励をいただくとともに、受賞者の思いを届け、今後の大きな励みとする。また、当弁論大会についての国内への啓発活動の一環とする。

2 訪問先

☆ 安倍内閣総理大臣

平成26年3月17日(月) 11:45~11:55 総理官邸

☆ 岸田外務大臣

平成26年3月17日(月) 12:10~12:20 外務省大臣応接室

3 訪問者

○ 富宅 沙也加（北海高等学校 1年生）

○ SAVUSHKIN VLADISLAV（北海道日高高等学校 2年生）

《引率者》（北海高等学校 専任教諭 渡邊 雅利）

（北海道日高高等学校 教諭 岡島 礼久）

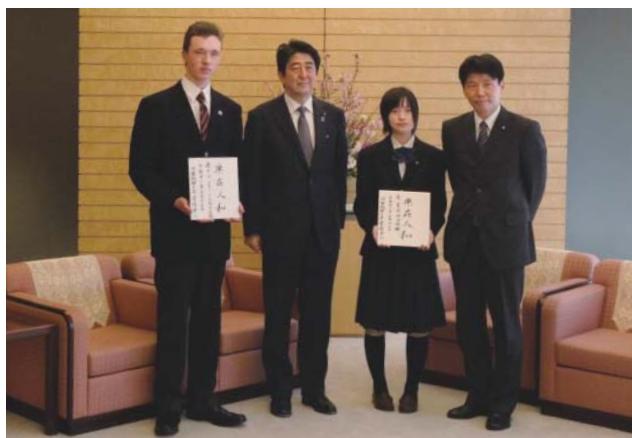
《同行者》（公益社団法人北方領土復帰期成同盟 細口、石部）

4 訪問概要

◇ 国会開会中でしたが、外務省をはじめ関係各省の皆様のご尽力により、安倍内閣総理大臣表敬訪問が実現いたしました。なお、総理表敬訪問に際し、山本一太内閣府特命担当大臣（沖縄及び北方対策担当）の同席をいただきました。

安倍総理大臣からは、「今回、北方領土についての弁論大会で、お二人がすばらしい弁論をされたということでお祝いを申し上げたいと思います。日本としては、ロシアとの間に平和条約を結びたいと考えておりますし、これからも日露で交渉を重ねていきたいと思います。若いお二人が様々な考え方を持って、あるいはこの問題について考えを深めていき、そしてそのことが今回、評価をされて受賞されたのですが、若い皆さんにしっかりととした考え方を持っていただくのは両国の関係にとって大変有意義であったと思います。」という激励の言葉とともに、「楽在人和」と書かれた色紙を頂きました。

同日、総理表敬訪問に引き続き、外務省にて岸田外務大臣表敬訪問を実施させて頂き、大臣から生徒へ激励を受けることができました。



【総理表敬】左から 日高校 サブシキン・ヴラディスラフさん、安倍総理大臣、北海高校 富宅 沙也加さん、山本北方担当大臣



【外務大臣表敬】左から 岸田外務大臣、北海高校 富宅 沙也加さん、日高校 サブシキン・ヴラディスラフさん

「総理大臣表敬訪問」年度別実績表

	表敬訪問日	内閣総理大臣		関係大臣	
第1回	昭和62年3月 2日	中曾根 総理大臣	総理官邸	倉成外務大臣	外務大臣応接室
第2回	昭和63年3月22日	竹 下 総理大臣	総理官邸	宇野外務大臣	外務大臣応接室
第3回	平成 元年3月15日	竹 下 総理大臣	総理官邸	宇野外務大臣	外務大臣応接室
第4回	平成 2年3月22日	海 部 総理大臣	総理官邸	中山外務大臣	外務大臣応接室
第5回	平成 3年3月22日	海 部 総理大臣	総理官邸	鈴木政務次官	政務次官室
第6回	平成 4年3月17日	加 藤 官房長官	大臣室	兵藤欧亜局長	欧亜局長室
第7回	平成 5年3月23日	宮 澤 総理大臣	大臣室	柿澤政務次官	政務次官室
第8回	平成 6年3月30日	細 川 総理大臣	大臣室	東 政務次官	政務次官室
第9回	平成 7年3月29日	村 山 総理大臣	総理官邸	柳沢政務次官	政務次官室
第10回	平成 8年3月25日	橋 本 総理大臣	総理官邸	浦部欧亜局長	欧亜局長室
第11回	平成 9年4月 1日	橋 本 総理大臣	総理官邸	浦部欧亜局長	欧亜局長室
第12回	平成10年4月 1日	村 岡 官房長官	総理官邸	柳井事務次官	事務次官室
第13回	平成11年4月 2日	小 渕 総理大臣	総理官邸	武見政務次官	政務次官室
第14回	平成12年3月31日	小 渕 総理大臣	総理官邸	山本政務次官	政務次官室
第15回	平成13年3月14日	森 総理大臣	総理官邸	衛藤外務副大臣	副大臣室
第16回	平成14年3月13日	小 泉 総理大臣	総理官邸	植竹外務副大臣	副大臣室
第17回	平成15年3月11日	小 泉 総理大臣	総理官邸	土屋政務官	政務官室
第18回	平成16年3月15日	小 泉 総理大臣	総理官邸	逢沢外務副大臣	副大臣室
第19回	平成17年3月 8日	小 泉 総理大臣	総理官邸	町村外務大臣	大臣応接室
第20回	平成18年3月 9日	小 泉 総理大臣	総理官邸	麻生外務大臣	大臣応接室
第21回	平成19年3月12日	安 倍 総理大臣	総理官邸	麻生外務大臣	参院外務省控室
第22回	平成20年3月 3日	福 田 総理大臣	総理官邸	小野寺外務副大臣	外務副大臣室
第23回	平成21年3月11日	麻 生 総理大臣	総理官邸	中曾根外務大臣	大臣応接室
第24回	平成22年3月23日	鳩 山 総理大臣	総理官邸	前原内閣府特命担当大臣	大臣応接室
第25回	平成23年3月11日	—	総理官邸	伴野外務副大臣	副大臣応接室
第26回	平成24年3月13日	野 田 総理大臣	総理官邸	玄葉外務大臣	大臣接見室
				川端内閣府特命担当大臣	大臣室
第27回	平成25年3月11日	安 倍 総理大臣	総理官邸	山本内閣府特命担当大臣	総理官邸
第28回	平成26年3月17日	安 倍 総理大臣	総理官邸	岸田外務大臣	大臣応接室
				山本内閣府特命担当大臣	総理官邸

第28回 高校生弁論大会記録写真

1 開会



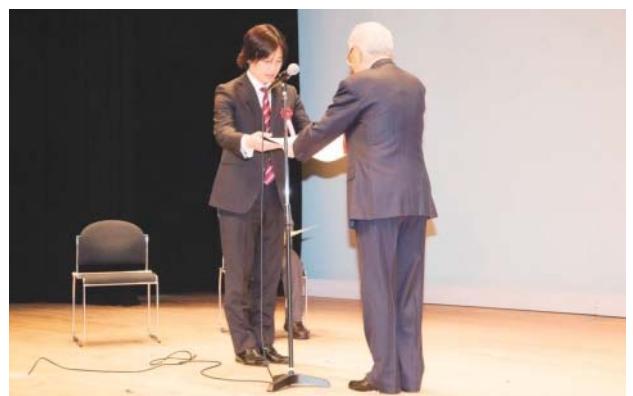
司会・中村 泉

開催挨拶する堀会長

2 感謝状贈呈（公益社団法人北方領土復帰期成同盟会長感謝状）



立命館慶祥高等学校



北海道別海高等学校

3 弁論発表



弁論会場の様子



弁論発表の様子



弁論発表の様子



審査の様子

3 弁論発表



聴衆



弁士の皆さん

4 アトラクション



5 審査・表彰



審査の様子



審査の様子



審査講評



審査講評を聴く弁士の皆さん



最優秀賞の表彰（北海高校：富宅さん）



最優秀賞の表彰（北海高校：富宅さん）



優秀賞の表彰（日高高校：サブシキンさん）



優秀賞の表彰（日高高校：サブシキンさん）



優良賞の表彰（鹿追高校：稻葉さん）



優良賞の表彰（根室西高校：安田さん）



優良賞の表彰（北海学園札幌高校：鶴海さん）



参加者全員による記念写真



入賞者記念写真



最優秀賞・優秀賞者記念写真

第28回 “北方領土を考える” 高校生弁論大会の記録

発 行：公益社団法人北方領土復帰期成同盟
札幌市中央区北1条東1丁目2番5号
明治安田生命札幌北一条東ビル 7F
TEL：011-205-6500
FAX：011-205-6501
H P：<http://www.hoppou-d.or.jp/>

毎年2月7日は『北方領土の日』です

北方領土問題に対する国民の関心と理解をさらに深めるために、政府は昭和56年1月6日閣議了解により、毎年2月7日を「北方領土の日」とすることを決めました。

2月7日は、安政元年(1855年)伊豆下田において日露通好条約が調印された日で、平和的な話し合いによって、両国の国境を択捉島とウルップ島との間に定められました。

この歴史的な意義から「北方領土の日」として最もふさわしい日とされたのです。

『北方領土の日』前後には、国民世論を盛り上げる各種の行事が全国各地において開催されています。ぜひ、ご参加・ご支援をお願いします。

【ウルップ島を含み国境を表した地図】

